

韓国伝統建築にみられる象徴性とその造形表現

著者	文 鍾 萬
号	1166
発行年	1990
URL	http://hdl.handle.net/10097/9973

氏 名	Moan 文 鍾 萬
授 与 学 位	工 学 博 士
学位授与年月日	平成 2 年 11 月 14 日
学位授与の根拠法規	学位規則第 5 条第 2 項
最 終 学 歴	昭 和 55 年 8 月 延世大学校大学院建設工学科修了
学 位 論 文 題 目	韓国伝統建築にみられる象徴性とその造形表現
論 文 審 査 委 員	東北大学教授 坂田 泉 東北大学教授 桂 久男 東北大学教授 長友 宗重 東北大学教授 松本 啓俊 東北大学教授 杉山 晃一

論 文 内 容 要 旨

東西にわたる芸術の表現内容は、西洋の強烈な自己主張に対して、東洋では自己制御による控え目なそれが理想であるとされ、それ故にこそ創案よりも既成のものを新しく表現することに力を注いできた。古代の建築設計計画に目を馳せるとき、建築家の個性よりも当時の社会や、文化的に認められていた理想的な信念が反映していると推察されるのである。従って伝統建築を正確に理解するためには、古代における普遍的な価値観を通して探求することが重要かつ意義深いことと考えられる。

西洋の建築文化が自然主義的であり数学的な世界観を基盤としているのに対して、東洋のそれは宗教的な神秘主義が深く浸透している。さて対象を韓国伝統文化に向けると、その伝統思想である三神五帝思想と、外来思想ではあるが土着化した釈迦の仏教、孔子の儒教、老荘思想、周易思想などが漢民族の人生観及び世界観を形成する基盤になっている。このような思想体系は、伝統建築を形成する内的な根幹要素であり、また当時の普遍的な価値観でもあった。

しかし韓国伝統建築についての既存の研究は、建築自体の内的な特性の把握に留まっているに過ぎず、伝統建築の特性やその背景としての思想や宗教との関係を究明しようとする本格的な試みは殆どみられないし、その方法論的な面においては西洋の自然主義的、幾何学的な方法だけに依存する場合が大部分であった。

本研究では、その対象建築を韓国木造遺構に求め、その中から伝統性を良く保持している寺院建築を選び、その形態を最も特徴付ける開口部の意匠に焦点を合わせて、その比例特性を分析検討し、これを基本において当時の普遍的な民族的価値観を通すことにより、すなわち韓国の伝統思想であ

る三神五帝思想によって解釈することが目的である。

本論文は全体として7つの章から構成されている。第1章は研究の目的、方法、研究の意義について論述し、第2章から第6章までは研究の内容であり、第7章で全体をまとめた。

第1章では前述のような目的を持って、伝統建築の造形的特徴と宗教思想の象徴性とのかかわりを分析することにより、そして韓民族文化の中での建築が中国文化と如何なる関連性を持ちながら展開したかについて究明しようとする本論文の意義について考察を加えた。

研究の方法としては、

- ① 開口部の比例特性を把握するためにまず柱間である御間、狹間、退間の開口部の縦横の長さによる比例値を計測して、柱間の位置による比例の傾向を分析した。また建具の比例についても同様の方法により分析を進めた。
- ② 開口部及び建具の比例に関連する要因を抽出してこれらを再び細かく分類してから、この分類項目によって開口部及び建具の比例特性を考察した。
- ③ 寺院建築の外観の一般的な造形意匠を三神五帝思想と関連付けながら、開口部及び建具にみられる比例特性を明らかにしてその意味を解釈した。

第2章では原始宗教がその社会で持つ象徴性についての考察である。それは韓国の上古や古代における思想の中に内在している三神五帝思想を理論的に追及して、この思想の底流に存在する象徴体系と伝統的な建築文化との関連性を分析することにより、考察の論理的な基盤を形成させたのである。

この三神五帝思想を一言でいえば「一上帝」即ち、神の位階的秩序ともいえるのであって、また実例では景福宮の慶会楼に直接適用されている周易の数理論とも密接な関係を持っている。この周易の「一」は宇宙の根本である絶対的な数として、「三」は自然世界の変化が始まる数として重要な意味を持っている。三神五帝思想は数字が内包する数理論の意味と、その基本的な図形が保持している象徴的な意味とを、それが関連する図形によって表現することができるのであり、それはまた建築物の配置においても対応がみられる。

第3章では建築の形態美の中で第一構成原理である比例に関しての論考である。

東洋と西洋との比例概念を比較するとき、これら互いに異なる側面を持っている。即ち、西洋での比例理論は数学的關係、幾何学的關係、それから人体を基本にしているが、東洋での比例は形而上学的価値の位階を反映し、宗教的な象徴主義の形態を成立される源になっている。

第4章では、韓国伝統建築の立面構成の要素を、位階的に体系化することによって開口部がその体系内に保有している位相を究明することができ、その立面における意義を理解した。建築の立面における軸部（壁体）は種々の部材で構成されており、そこは屋根部や基壇部よりも意匠表現に力を注ぐこととなり、必然的に印象が強くなる。この軸部の比例は、その基本的な構成要素である頭

貫（横材）と柱（縦材）によって構成され、壁体内のより細部的な要素である建具は、その比例を補完する性格を持っている。

第5章では、韓国の仏寺建築の中で、特に資料として価値が高いと判断される72棟を選択し、開口部及び建具の比例と関連要因を統計的に処理して分析を試みた。そして開口部の比例に影響を及ぼす要因としての①建築位階②建築年代③建築の規模（正面間数）④斗栱の形式⑤斗栱の手先数⑥窓格子の文様⑦屋根の形態を仮定して考察を加えた。

実例が少なく、影響が殆どみられないと考えられる変数を除外して分析して見た結果、開口部及び建具の比例と相関性の深い変数は次の通りになった。即ち建築位階の場合は主建築、規模の大きい建築、斗栱は多包、手先は手先数が多い建築、交箭、ソスル箭の文様の窓格子形態の建築、屋根は入母屋造の建築、建築年代は後期になる程、強く表れた。このように相関性の大きい変数による開口部の御間、狭間、退間の比例は「1」に接近しており、御間、狭間、退間の建具の比例値は「3」に接近していた。

このような事実からみると、主建築は相対的に規模が大きく、多包形式であり、手先数が多く、入母屋造、窓格子は交箭、ソスル箭の建築場合であるといえる。

第6章は、三神五帝思想を通して正面の一般的な象徴体系を段階的に考察した後、その開口部及び建具の比例の分析により得られた象徴的体系を考察して韓国伝統建築の開口部が持つ特性を解明した。

さらに建築は自然界の天と地の二つの体系によって生じたと考える場合、建築群を例にとると、中心に位置する主建築の正面の造形意匠は、左右の建物の妻側によって一層強調され、また単独の建築においては、屋根は天を、基壇は地を、生活空間としての軸部は太をあらわしていると分析できる。その正面軸部にみられる開口部の比例値をみると「一」に接近する傾向があり、建具の比例値は「三」に接近する傾向を示しているが、これは三神五帝思想での一上帝と三神を各々幾何学的に象徴化したと考えられる。従って正面開口部及び建具の比例値は三神五帝思想の一上帝と三神の象徴的な図形体系が反映していると解釈され、「五」については方位の空間表現として、中心仏堂とそれをとり囲む四周の諸建築による伽藍配置にみることができる。

第7章は結論の部分として第2章から第6章までの結果をまとめたものである。

審 査 結 果 の 要 旨

建築意匠の研究は、従来その造形様式を対象としたものに限られ、その造営時の価値観や思想的背景にまで踏み込んだ論考は殆んどみられなかった。東洋建築の場合は古代にさかのぼれば上る程、宗教的な神秘主義が深く滲透していて、建築家の個性よりも文化的に認められた理想の信念の下に実現されたと推察されるのであるから、伝統的建築を正確に理解するためには、古代の普遍的な価値観を通して考究することが重要かつ意義深いことと考えられる。本論文はこの論点に立ち、伝統性を良く保持している寺院建築から72棟を選出し、その形態を最も特徴付ける正面意匠についての比例特性を分析検討し、これを基本において当時の民族的価値観、即ち三神五帝思想によって検証したもので、全編7章からなる。

第1章は研究の目的、課題の方法について述べている。

第2章は、韓国の思想の底流にある象徴体系と伝統的文化との関連性を考察した結果、そこに原始宗教の持つ象徴性の論理的基盤が形成されていることを説明している。

第3章は建築形態美の中であって、美の第一構成原理である比例について東洋と西洋を対比することにより比較検討を加え、東洋のそれは形而上学的価値の位階が反映していて、それが宗教的な象徴主義の形態を成立させる源であることを提示している。

第4章は韓国伝統建築の立面構成要素に関して、それを位階的に体系化することによって開口部がその体系内に保有している位相を考究し、軸部の比例は柱（縦材）と貫（横材）が基本的構成要素であるとして、さらに細部の要素である建具が比例を補完する性格を有してといると提言している。

第5章は、開口部と建具の比例の統計処理による値がそれぞれ「1」、「3」に接近していることを述べ、これは三神五帝思想の中で一上帝の作用体である三神を図形化したと提案し、中国の周易の宇宙の根本である絶対的な数の「1」、そして自然世界の変化が始まる数は「3」に対比されるとしてそこに重要な意味のあることを指摘している。

第6章は、三神五帝思想を通して正面の一般的な象徴体系を段階的に究明し、さらにその開口部と建具の比例を分析してすることによって得られた象徴体系を検討して、韓国伝統建築の開口部が持つ特性を明らかにしている。

第7章は結論である。

以上要するに本論文は、韓国木造建築の正面造形比例にみられる数値の詳細な検討の結果、その背後に潜在する三神五帝思想が重要な造形表現の要素であるとして多くの提言提案を行うことにより有用な新しい知見を与えたものである。なお韓国建築は古代日本建築の生みの親であるが故に、そして百済より日本へ周易が伝えられたのは6世紀初頭であるところから、とりも直さず本研究は従来試みられることのなかった日本古建築の比例特性を解明するための道を拓いたことになり日本の建築意匠学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は工学博士の学位論文として合格と認める。